

## 学位論文題名

## ピンドロス研究 詩人と祝勝歌の話者

## 学位論文内容の要旨

本論文は、古代ギリシアの詩人ピンドロスの祝勝歌を研究対象とし、その受容と研究史の問題点を検証しながら、新たな祝勝歌理解のために、独自のテーゼを立てようとするものである。その方法は、厳密な文献学的研究に基づいたテキスト分析であり、従来の研究において特に難解な問題として論議されてきた、創作者ピンドロスと詩句の中に現れる「私」との関係が、このテーゼに基づいて再解釈され、その妥当性が論証される。

ギリシアの合唱隊抒情詩人であるピンドロスの祝勝歌は、オリンピック競技会などの勝利者を褒め称える詩で、古代以来、受容と研究の対象でありつづけ、現在、ほぼ45篇が奇跡的に残っている。しかしこの祝勝歌は、2500年におよぶ受容と研究にもかかわらず、核心のところで読者の理解を拒否する難解な詩としても知られてきた。序論においては、従来のピンドロス研究の問題点が詳細に検証され、本論文の研究史上の立脚点、課題と構想が提示される。

論者によれば、この祝勝歌をめぐる研究のうち、大きく取り上げるに値するものは、二十世紀に出たふたつの研究だけである。ひとつは、シャーデヴァルトの『ピンドロス祝勝歌の構造』(1926)、もうひとつは、バンディーの『ピンドロス研究』(1962)である。両者の研究は、それぞれに新たな知見を提起して評価すべき点はあるものの、結局、祝勝歌の話者とはいったい誰なのか、それは、「テーバイの詩人ピンドロス」本人とどのような関係にあるのか、という本質的な問題は依然として解明されないままに残されてしまったと批判される。本論文は、シャーデヴァルトとバンディーの研究を跡付けながら、彼らのやり残した仕事、すなわち祝勝歌の話者と創作者ピンドロス自身とを巡る関係を、新たな視点からさらに徹底的に解明しようと試みたものである。その際、論者の考察はつねに合唱隊が祝勝歌を実際に上演する場面を前提にして進められる。

第1部は、このような先行研究を踏まえ、その問題点を検証しながら、次のようなテーゼを立て、従来の祝勝歌研究には見られなかった独自の観点を導入する。すなわち、「ピンドロスの祝勝歌の話者は、タミアース・コーモーン(祝勝歌の場の宰領)とも名づけることができるような、個々の祝勝歌の成立する時とところかぎりの、架空の存在である」。詩句に登場する「私」は、詩人ピンドロスとは全く別の存在であり、祝勝歌本文は、「詩というよりは上演台本である」と見なされるのである。このテーゼを立証するために、論者は祝勝歌を、1. ムーサ文(「私」と詩歌の女神ムーサとの関わりを表現している章句)、2. 中止のための定式(話題の転換を「私」が登場して断る章句)、3. エバーン章句(「私」

は「ここにやって来た」と表現している章句)、4. 義務のモチーフ(「私」は「勝利者を讃えねばならない」という趣旨を表現している章句)の四範疇に分類し、これらに共通する特徴を綿密な言語分析に基づいて考察する。その結果、「私」は、つねに行進やさまざまな動作を示す表現によって描写されていることが確認され、「私」が祝勝歌の上演の場、聴衆の面前に臨在しているものであることが指摘される。論者はこうした言語分析を、ギリシア語の「歩み、ステップ」を意味する「バシス」という語を用いて「バシス言語論」と呼ぶ。本論文では、このような極めて独創的な考察に基づいて、祝勝歌の話者「私」は、合唱隊、より精密には合唱隊によって担われる「祝勝歌の場の宰領」とも名付けられうる存在であることが結論づけられる。

第2部および付論では、従来の研究において「私」とピンダロス本人を同一人物と見なす主要な論拠となっていた「詩人文」、「テーバイ文」が取り上げられる。これらの歌は、一見、創作者の「詩人」が「私」であると読まなければ理解不能に見えるが、それは、文学の創作、受容には、ある仮構が必要であるということを見逃した表面的な捉え方に過ぎないのであり、ここには、1. 即興上演という仮構、2. 創作者が自分の存在を他者化するという仮構、3. 語り手が創作者を演じるという仮構が認められると主張される。こういった仮構は、文学的な表現一般に見られる現象であるばかりではなく、他のピンダロスの祝勝歌においても類例があると指摘され、その分析が行われる。また、まさにこの仮構を認めることができなかったからこそ、当該の祝勝歌がこれまで難読の部分であり続けてきた、という事実が指摘される。「バシス言語を駆使する合唱隊」、「上演台本としての祝勝歌」、そしてこのような「仮構の技法」という観点に基づいて祝勝歌を考察するならば、本論文のテーゼの正当性が十分な説得力をもって主張され得ると結論づけられる。

ピンダロスの祝勝歌は、合唱隊歌であり、合唱隊によって上演されたものであるが、従来の研究においてはこうした側面から正当に扱われたことは一度もなかった。本論文は、ピンダロスの祝勝歌を、詩テキストではなく、演劇台本としてのテキストとして読み解こうとする最初の本格的なピンダロス研究であり、その独創的な着眼点と分析手法に基づく研究成果は高く評価され得る。

なお本論文の構成は以下の通りである。

序 論    この研究が目指すもの、その研究史上の立脚点

第I部    basis 言語論

序 章    本論文が言語記述に似ている理由

第1章    臨場感

第2章    テーゼ

第3章    ムーサよ、私のそばに立て

第4章    権を止めよ

第5章    私はここにやって来た

第6章    私は勝利者を讃えねばならない

第II部 basis 言語を駆使する合唱隊のためのいくつかの技術

序章 バッキュリデースとの比較など

第1章 誰か勝利者の館の門まで行って・・・

第2章 祝勝歌の始まりの合図としてのハーモニー

第3章 詩人を演じる「私」

第4章 私はデーバイで生まれ育った

付 論 門の前の祝勝歌

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 安 藤 厚

副 査 助 教 授 千 葉 恵

副 査 教 授 田 中 利 光 (北星学園大学)

## 学 位 論 文 題 名

### ピンドロス研究 詩人と祝勝歌の話者

審査委員会は、本論文が提出されて以後、五回にわたって委員会を開催し、申請論文を慎重に精読して審査するとともに、長時間にわたる口述試問を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、本論文に対する以下の記述のような評価に鑑み、審査委員全員が一致して、安西眞氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達し、文学研究科教授会に報告した。教授会は、この報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

安西氏の論文は、古代ギリシアの詩人ピンドロスの祝勝歌を研究対象とし、その受容と研究史の問題点を検証しながら、新たな祝勝歌理解のために、独自のテーゼを立てようとしたものである。その方法は、厳密な文献学的研究に基づいたテキスト分析であり、従来の研究において特に難解な問題として論議されてきた、創作者ピンドロスと詩句の中に現れる「私」との関係が、このテーゼに基づいて再解釈され、その妥当性が十分な説得力をもって論証されている。

論者によれば、従来のピンドロス研究史上、大きく取り上げるに値するものは、二十世紀に出たふたつの研究だけである。ひとつは、シャーデヴァルトの『ピンドロス祝勝歌の構造』（1926）、もうひとつは、バンディーの『ピンドロス研究』（1962）である。しかし、両者の研究は、それぞれ新たな知見を提起して評価すべき点はあるものの、結局、祝勝歌の話者とはいったい誰なのか、それは、「テーバイの詩人ピンドロス」本人とどのような関係にあるのか、という本質的な問題は依然として解明されないままに残されてしまったと批判される。

安西氏は、この問題を解決するために次のようなテーゼを立て、従来の祝勝歌研究には見られなかった独自の観点を導入する。すなわち、「ピンドロスの祝勝歌の話者は、タミアース・コーモーン（祝勝歌の場の宰領）とも名づけることができるような、個々の祝勝歌の成立する時とところかぎりの、架空の存在である」。詩句に登場する「私」は、詩人ピン

ダロスとは全く別の存在であり、祝勝歌本文は、「詩というよりは上演台本である」と見なされるのである。このテーゼを立証するために、論者は祝勝歌を四つの範疇に分類し、これらに共通する特徴を綿密な言語分析（「バシス言語論」）に基づいて考察する。その結果、「私」は、つねに行進やさまざまな動作を示す表現によって描写されていることが確認され、「私」が祝勝歌の上演の場、聴衆の面前に臨在しているものであることが指摘される。本論文では、このような独創的な考察に基づいて、祝勝歌の話者「私」は、合唱隊、より精密には合唱隊によって担われる「祝勝歌の場の宰領」とも名付けられうる存在であることが結論づけられている。

ピンダロスの祝勝歌は、合唱隊歌であり、合唱隊によって上演されたものであるが、従来の研究においてはこうした側面から正当に扱われたことは一度もなかった。本論文は、ピンダロスの祝勝歌を、詩テキストではなく、演劇台本としてのテキストとして読み解こうとする最初の本格的なピンダロス研究であり、その創見は、充分に手堅く実証されている。

また、安西氏は、従来の研究において「私」とピンダロス本人を同一人物と見なす主要な論拠となっていた「詩人文」、「テーバイ文」についても、独自の見解を提示している。これらの歌は、一見、創作者の「詩人」が「私」であると読まなければ理解不能に見えるが、それは、文学の創作、受容には、ある仮構が必要であるということを見逃した表面的な捉え方に過ぎないものであり、「仮構の技法」という観点に基づいて祝勝歌を考察するならば、本論文のテーゼの正当性が十分な説得力をもって主張され得ると結論づけられる。

このように、ピンダロスの祝勝歌を上演のための台本テキストとして再解釈しようとする安西氏のアプローチは、従来のピンダロス研究には見られなかったものであり、その独創的な着眼点と分析手法に基づく研究成果は高く評価され得る。なお、論者のピンダロス研究は、本論文の骨子をなす内容がすでに日本西洋古典学会の学会誌（『西洋古典学研究』38, 1990）や海外の雑誌（*Bulletin of the Institute of Classical Studies* 39, 1994）にも掲載されており、国内でも国際的にもすでに客観的な評価を受けている。